

民俗学における「漁業民俗」の研究動向とその課題

Research Trends and Themes in Japanese Maritime Folklore

中野 泰
NAKANO Yasushi

要旨：本稿は、「漁業民俗」の研究動向（1980年代～）を取り上げ、海洋民族学（海洋人類学）と対比しつつ、社会・歴史的な文脈を重視する視角から整理・検討した。研究史の展開を4つのテーマ領域（「漁民社会研究」「知識・技能研究」「サブシステム研究」「資源利用の研究」）別に整理し、以下の3点が主たる課題として導かれた。

既存の「漁業民俗」の研究においては、第一に、「漁業民俗」の担い手の位置づけが、漁村、あるいは主体的個人という二通りの捉え方に乖離したままで不十分であること、第二に、「漁業」の範囲を、生産や技能中心の概念へ暗黙裡に限定しており、現況を捉える困難さがあること、第三に、変化の契機、条件や要因の分析が不十分な点である。

以上の課題に対し、本稿では、第一に、世帯・家族レベルに焦点化して「主体」概念を深化させ、社会構造との間の弁証法的関係を重層的に関連づける必要を説いた。そのためには、具体的な場の文脈に即して検討する必要がある。第二に、「漁業」概念を拡張し、家内労働を含め、地域社会における生活文化と関連させること、第三に、地域社会外と連鎖する関係性も捉え、科学技術や社会経済の動向などのより広い国内外の時代的文脈に位置付け、変動の契機、その諸条件や要因の分析が必要であると説いた。

漁業をめぐる価値観が多様化しつつある現在、「漁業民俗」の研究は、グローバルに展開する関係性を対象に入れ、異なる立場で関わる者へもミクロに迫り、現象を取り巻く力関係を歴史的社会的文化的文脈へ位置づける必要がある。その力関係を対象化する上で、巷間に流布する「海民」概念など、「主体」に関わる民俗学の表象が有する歴史的背景と政治性への省察を行う必要もあることを説いた。

▶キーワード 主体 知識 サブシステム 資源 文脈

1 はじめに

本稿は、1980年代後半以降の「漁業民俗」の研究動向を、海洋民族学（海洋人類学）にも視野を広げ、整理・批評し、今後の研究の展望を得ることを目的とする。民俗学においては1980年代以降の研究成果が整序されていない⁽¹⁾。1990年代以降、海事領域では国内外で大きな変動があり、加えて資源利用や管理を目的とする応用的研究が求められている。学問の性格や存立についての姿勢が改めて問題化されている現在、この状況は、「漁業民俗」の研究の存在意義に関わる重要な問題だと考えられるからだ。

海洋民族学を提唱する秋道智彌は、「海人」が担う漁撈、漁撈文化を研究対象とし、海と陸の関係性、人や海洋生物の移動性、歴史性という3つの軸を挙げる [秋道 1995]。この整理から「漁業民俗」の範疇を簡略化すると、自然と人の関係、人と社会の関係、人と歴史の関係の三つの側面に整理される。本稿では、後者二つの側面、社会・歴史的な文脈

を重視する。その理由は、「漁業民俗」研究が社会的関心を有しながらも、1980年代以降、生態人類学や海洋人類学の影響から生態学的関心を強めていることと関係する⁽²⁾。

桜田勝徳の用語「漁業民俗」に明確な定義はないが、桜田はそれを「海部」に連なる古態と、漁村における複合的に連関する生活様式の二通りに捉えていたようだ。桜田は、専業漁村と農村的漁村の差異に留意し、民俗事象の採集を担い手と連関させる方法が必要だと考えた〔桜田 1954：207-209〕。その後、文献紹介の動向整理や民具研究が進められ、1980年代に「漁業民俗」研究の重要な展開があった〔小川 1970、1976、1984、湯川 1979〕。一方では、桜田勝徳の再評価に伴い、漁村や移住漁民の研究が展開し、他方では、生態人類学や環境社会学の影響に伴い、自然の知識や技術の研究、複合生業研究、マイナー・サブシステム、資源利用の研究など複数のアプローチが登場した。

この間の研究動向は生業や環境研究として整理されたが、「漁業民俗」の研究の視角や方法は理論的に検討されなかった〔野地 1998、菅 2001、小島 2001〕。ところで、社会民俗的視角から見ると、民俗学には機能構造主義的に完結した統合体を捉える偏向と、その視角への批判から個人を重視する傾向が顕著である〔中野 2006〕。本稿では、この2つの傾向が、桜田勝徳の課題を継承する「漁業民俗」研究と、生態人類学的な「漁業民俗」研究の両者にも認められる特徴であることを指摘する⁽³⁾。「漁業民俗」の研究視角は、個人と漁村の択一的選択にではなく、両者の視角を止揚する視座に求められなければならない。本稿では、その視座の模索を、研究史の批判的検討から歴史的・社会的文脈と関連づけて行う。以下、漁民社会研究、知識・技能の研究、サブシステム研究、資源利用の研究の順に検討を加えていく。

2 漁民社会研究

(1)沿岸漁民社会研究

1980年代の学史においては高桑守史が重要な位置を占める。高桑は、沿岸漁村における半農半漁村の基礎的構造を明らかにする必要性を説き、能登半島の4漁村を対象に、生業の構成、漁業秩序の支配形態、漁業の周年性／季節性を指標とし、I兼業型、II共生型、III出稼型の3類型を抽出する〔高桑 1976c、1983：11-13〕。I兼業型は主漁従農のA型と主農従漁のB型に整理される。類型間は「歴史的段階」を示し、I兼業型のA型からII共生型や、III出稼型が派生する。I兼業型のA型主漁従農は漁業の資本主義化が進んでいる「発展型漁村」、B型主農従漁は資本主義化が「停滞している後進型漁村」と位置づけられる。つまり、II共生型はより「資本主義化が進捗」しているが、III出稼型は「過剰人口の再生産を脱皮することなく存在」しており「後進型の漁村の一タイプ」となる。

高桑の視角には2点の特徴がある。1点目は、階層分析において土地所有の外、本分家、姻戚や擬制的親子関係までを関連づけるように、漁業が多面的な連関性の中で営まれていることを重視する点である。「海部」研究のように、民俗語彙や要素の比較によって伝播を検討するのではなく、特定村落において相互に連関する統合体を構造分析する。2点目は、漁村の生業構成が兼業的であることを重視した点だ。高桑は日本の漁村で「最も数の多い」沿岸漁村は「農民漁業」だとする。しかし、問題点もある。1点目は、出稼型の類型を設けながら、出稼ぎ先や移住先の漁村の位置づけを欠いた点である。この点は、桜田

勝徳が指摘した漁村民俗の課題に連なっており、後に野地恒有が展開する点と関わっている。2点目は、類型抽出における集団主義的バイアスの存在だ。例えば、「共生」や「出稼ぎ」という名辞を、漁村を代表させるものとして採用することで、差異ある家々のあり方を捨象し、抽象的な資本主義的發展段階の一つを示す類型に読み替えている。兼業を重視する視角は、後の複合生業研究に連なる可能性があったが、村落という集団的平均的な姿に回収されたといえる。

(2) 移住漁民研究

野地恒有は、桜田勝徳の研究を整理し、漁村民俗の課題が戦後に意識化されたと見る。その課題は、漁村の①合理的側面、②出漁者と移住者、③都市的性格の3点である。漁村の「流動性」として「外部との関係」を重視する桜田の視角を継承し、野地は移住漁民の研究を展開する〔野地 1987、2001：100、cf. 2008〕。野地は、生活史、漁撈技術、在来漁業の社会的側面へ注目し、移住の契機、移住漁民間の活動、在来漁民との関係を比較検討する。その結果、移住漁民の漁業と在来漁業との関係は、依存型と独立型の2類型に大別され、独立型の移住の条件となるのは既存漁業が「空白地帯」であること、依存型においては「一時的移住」（半・移住）にとどまるという。

野地は、船籍地を移動せず、居住地を移動させる状態を「半・移住」と表現し、これを漁村の外側から関わり、漁業を変化させるものと捉えている。構造を捉える静態的でステティックな既存の漁民社会研究の枠組みを相対化し、野地は動的な視角に立つ。また、移住における漁撈技術を資源や経済状況と関連させ、単一・周年性、開拓性、補完性、汎用性といった指標で整理し、その重要性を説いた。問題もある。小川徹太郎は、野地による柳田国男の島々への関心の捉え方が不十分で、それは「人道主義的植民地主義」の言説として「道徳的価値付け」を伴うものであることを説き、また、桜田勝徳の漁村民俗の視点の変化が1930年代の民俗学における「郷土の道徳」究明という文脈と関わっていること、最後に、野地による移住概念の技術的整理によっては、技術の「衝突や混淆の過程」、社会的な「葛藤と新たな社会関係」の構築過程を捉え難いという〔小川 2003b〕。「歴史の中で批判的な力」を発揮するために、他分野の研究も視野に入れ、また、ミクロな「交渉過程や判断・行動のタイミング」を把握する必要があるとする〔小川 2003b：96〕。

(3) 漁民研究の課題と展望

移住漁民の視角においては、個人と集団との間の弁証法的関係性、及び、その関係性の広がりとその動態を規定する要因や社会的条件の関連づけが重要である。

小川徹太郎は、河岡武春の『海の民』の書評で、中華秩序の水産物流通構造と、漁業の法令や技術展開の文脈に関連づける必要性を説く〔小川 1988：130-133、cf. 石原 2007〕。「海の民」は移動が自在な民ではないからである。漁業技術の伝播や沖合遠洋漁業への進出、あるいは移民の現象自体近世近代の物産振興、殖産興業や植民地などを契機とし、時代的特性を有している〔池田 1992、2004、大田区立郷土博物館編 1995、中野 1999、2003、武田 2002〕。

高桑守史は「伝承母体」という用語が「人を捨象して」きた点を批判し、「民俗を生成し、保持管理し、変革する主体」として「伝承主体」という言葉を定義する〔高桑 1994：34-35〕⁽⁴⁾。高桑によるこの視角は集団主義的視角を超克する可能性を秘めている。だが、

その達成は生活史の手法に託されながら事例報告にとどまっている。野地もこのアプローチを採用し、「半・移住」の事例を検討した。しかし、野地によるそれは、「語りの虚構性を排除」し「全体に共通する傾向をとらえる」手法であり、主体へ対する関心は認められない〔野地 2001〕。河原典史や増崎勝敏が大阪府の出稼ぎ漁業をミクロに検討しているように、生活史の個別性を丁寧に拾い上げ、個人と組織、地域や時代の関わりを捉えていく必要がある〔河原 2003、増崎 2009〕。主体を、実践、エージェンシー、共同体と関係づける視角は東南アジア海域世界や近代日本の議論に見られる〔関 2007〕。石原俊は、瀬川清子が出会った一移民女性の足跡を中心に、小笠原諸島で近代を生きた「海人」の主体性が、いかに法、権力や差別と対峙しながら、それらに絡め取られたものであったかを、個別の事件や瀬川の聞き取りをクリティークしながら描いている〔石原 2007〕。

出稼ぎ、移住、移民、トランスナショナリズムの研究は、出身地における家族、地域社会との間の関わりが、単純な帰村や離村に収束されず、移住の連鎖、ネットワークの構築など、時代の制約を受けながらも持続的なものであることを指摘している。検討される内容も、生計維持活動にとどまらず、生活、文化、記憶やアイデンティティなど多面的な継承、変化、創造の過程などと多角的である〔武田 2002、Perez 2005、cf. 内田 2003、松田 2003、葉山 2005b〕。

桜田勝徳の課題を移住へ敷衍する視点は、動態的視点を前提としてであって、「定住」すなわち「移住の完了」に置かれる視角ではなく、また、漁民社会研究が移住漁民研究へ回収されるものでもない。主体に対する視角を深めつつ、歴史的・社会的文脈へ位置づけていくことが課題となろう。

3 知識・技能の研究

(1)自然知と技能の研究

1980年代に、篠原徹も新たな領域を開拓し、自然に関する民俗学的研究や環境民俗学が展開した〔篠原 1990、1995〕。篠原による自然知の研究は、動植物の名称や分類の研究、及び、それらの採集、捕獲行為についての技能の研究に分けられる〔篠原 1986、1989、1993、1995〕。例えば、広島県三次の江川で行われる鵜飼を取り上げた研究では、鵜匠が野生動物である鵜の習性を「どのように馴致し、技術のなかに取り込」み、アユ・ウグイといった魚の集団に「どのような戦術をもって対処するのか」を検討する〔篠原 1989〕。鵜匠の小屋の前での観察や鵜匠との対話から鵜の生態と鵜飼の技能を把握する。技術は「鵜集団を統御」するそれと、「馴致の技術」及び、川漁における共同鵜飼いである。最大13隻もの舟において、アユの筋をみつけ、アサミからアユを淵へ追うソウガラミと称する技法とその「戦術」が詳細に復元される。

篠原の研究の特徴は、聞き書き中心の調査ではなく、観察手法によって数量化も含め、資料の幅を積極的に広げたこと、個人を対象にその者の有する民俗知や技能に焦点を当てたこと、生態や環境条件を重視したことにある。総じて、生態人類学的知見が背後にある。これまでも身体の延長として技術を捉える視角はあったが、技術発展史に終始していた〔宮本 1969〕。篠原の試みは、自然と対峙する個人の観察や経験によって獲得された知識と技能の体系化をはかり、民俗分類、技能やマイナー・サブシステムの研究へと連なり、

重要な位置を占める。だが、問題も残す。篠原は、自然知とは「文字を媒介にして獲得される知識ではなく自然と対峙し観察して獲得される知識の総体」とし、両者の関係を「時代が遡れば遡るほど自然知が増大し文字知が減少する」という。その変化の文脈は、一方で、村落内の階層、性差、識字者と関連し、流入してきたものが「いつのまにかその地で人々によって実践的な自然知に鍛えあげられた」とし、他方で、自然知から文字知へ流入することも多く、その歴史は複雑だとする〔篠原 1995: 1-4〕。興味深い指摘であるが、事例に基づく検討と、生活における機能の中に位置づける課題を残したといえる〔松井 1975〕。

(2)知識・技能研究の展開

卯田宗平は、GPSとヤマアテという「新・旧の技術」がいかに「混在」し、用いられているかを、琵琶湖沖島のゴリ底曳き網漁を例に検討している〔卯田 2001〕。知識・技能研究の理論化を進める卯田は、技術進歩による労働環境の変化やそれに対する「主体側の適応態」を評価する〔卯田 2003a: 26-31〕。卯田は、篠原徹らに倣って技術と技能を区別する。技術は「言語などの表現形式によって外在化・分節化できる知識に基づいて発揮」されるものであり、技能は「個々の技術を一連の漁撈活動のなかで統合化」されるものである。技能は「経験従属的な個人固有の知識」に支えられたカンとかコツなどの「言語やそのほかの表現様式に還元することが容易」でなく、「個人の経験と努力が不可欠」である。卯田は、経験による知識の獲得を特筆しつつ、主体が「集団内で共有化された知識」も取り込み、双方の知識を「たえず統合し修正を加えながら漁撈活動」を連続させていると説く〔卯田 2003a: 34〕。また、技術発展に関わる主体の対応について、機械化と装置化の二つの方向性へ整理する。機械化は「道具というハードウェアの発展」に代表され、装置化は「人間の記憶や認知能力というソフトウェアの発展」に代表される。卯田は、技術発展を契機に主体が「伝承のある部分を残し、ある部分を消し去り、また新たに何かを生み出すという切れ目のない営為をおこなっている」と整理する〔卯田 2003a: 41〕。

卯田の議論で課題になるのは、知識の獲得をめぐる社会的条件と、個人と集団の間の知識の動態の2点である。1点目に関して、Plath and Hillは、志摩の年輩海女と、その夫が操る船で操業する若い2人の季節的海女との間で行われる知識伝授が、専門的海女による利己的動機でなく、若手の海女の能力を伸ばそうとする継続的指導として行われる点を描く。専門的知識は頭の中に存在するものではなく、持続的社会関係によって形成される「社会的構築物」だという〔Plath and Hill 1987〕。この2人が参照する周辺的参加理論によると、知識や技術の学習は、集団へ周辺から参与して行くことによって序々に修得されるという〔レイヴ&ウェンガー 1993〕。この主張は徒弟制の場をモデルとする理論であるため、高度に複雑化し分業化が進展する産業的労働の場に適応できない問題点があるが〔福島 2001〕、海女を例にすれば、見習いや、舟の船頭、他の海女との関係が、海上だけでなく陸上における海女小屋においても対象化される必要がある〔Hill and Plath 1998, cf. 小島 1987、金 2000、中野 2003、大村 2002〕。

2点目に関して、川端牧は、個人と第三者との間の知識の動態を、糸満の魚売りの女性（アンマー）におけるセリの交渉の事例から説く〔川端 1999〕。川端は、魚名知識が、従来「民俗分類という形にまとめられた知識像」として描かれる傾向を批判し、それらが「社

会の成員に均一に認識」されているのではなく、個々人の「生活実践」に基づいた、社会内での「多様性に富んだ「動的」なものだという。魚に関する「独自の知識体系」は「魚販売経験」から築かれており、「知識の伝承経路」も問う必要がある [川端 1999]。川端は、個人の知識が他の魚売りや購買者との会話によって更新される動態を明らかにしており、この動態を飯田卓も「相互性」として重視している [飯田 2008]。

知識・技能の研究は、具体例に基づき、理論化も進められている。しかし、これらの研究は主体の能動性を高く評価する一方、それを可能とする条件や要因を十分に考慮していない。卯田が指摘した2類型（個人固有と集団内共有化）の相互関係を掘り下げるには、知識の動態過程に踏み込みつつ、また、歴史的過程に位置付ける必要もある。

(3) 知識・技能研究の課題

個人と集団間の相互交渉へ迫るには、知識や技術についての言説も取り上げ、その構築的性格を検討する必要がある。アイスランドのタラ漁における「船長効果」⁽⁵⁾ の議論は、船長の知識や技術の評価が、実際の漁獲高の成果を統計的に反映するものとしてではなく、漁船装備の近代化と漁船組織の複雑化を背景に、新たな操業形態の優位性を強調するレトリックとして分析される [Palsson and Durrenberger 1983]。中野泰は遠洋漁業における探索機器の導入を背景に漁場認識の変化の過程を跡づけ、漁場の知識と技術の評価を漁船内組織や機械化に関係付けようと試みている [中野 2003]。言説への注目は、知識や技術の本質ではなく、漁業をめぐる時空間を特定の社会環境の変動という文脈へ位置づけ、その場を生きる者達の関係性を捉える視角となる [Palsson 1994、Thorlindsson 1994、Palsson and Agnar 1998]。

知識の変化や歴史的動態について、安室知は、コイの成長段階名が、養殖地域において詳細なものとなっている点を取り上げ、その分類名彙が時間概念と量的概念という2つの性格に基づいていることを明らかにする。その理由は、近世以来の高度化された養魚技術が、特異な生態環境を有する地域へ導入され細やかなものとなったからである。安室は、養魚の知識・技術普及を目的とした書籍の検討も行い、具体的な歴史過程と関連づけ、民俗分類の歴史性を明らかにしている [安室 2003]。三田牧は、科学的知識やテクノロジーが糸満漁師の「海を読む」知識にいかに取り込まれているかを個人の営為から検討する [三田 2004]。三田は、旧暦8月頃、風はないにも関わらず大きな波だけが来るトゥミナミという現象の認識が「海上で体験する視点」と「鳥瞰図的視点」によって構成され、「科学的知識」が「土地の文脈」に翻訳され、「海を読む」知識として取り込まれ、経験的知識に「新たな意味」を加えて「再生」しているという [三田 2004: 481]。今後は、科学的知識を能動的に取り込む主体を、知識の歴史的形成の過程へいかなる形で位置付けるのが問われよう。

4 サブシステム研究

(1) 複合生業研究

1990年代にはサブシステム（生計維持）に関する研究の重要な展開があった。

安室知は、生計維持の視点にたって、「生業技術を人が生きていく上でいかに複合させているか」を問う。複合生業研究は、地域により異なる複合要素のレパートリーや、時代

によって変遷する要素間の関係性をトータルに捉え、「文化類型化」することを目的とする [安室 1992、1998 : 39-48]。安室は、条件の異なる5つの稲作地における複合生業の実態を明らかにしながら、水田漁撈・水田養魚・水田二毛作・畦畔栽培に代表される水田稲作の複合を、空間・時間・労力の3指標に沿って2つに類型化する [安室 1998 : 591-593]。「並列化」：水田稲作を行いながらも、稲作活動とは時間・空間・労力を別に行われる生業活動が「生計上同等の地位」で、しかも「各々の生業論理」に則って併存する。「内部化」：稲作を一年の中心的生業としながら、稲作以外の生業活動が、稲作の環境を利用することで稲作に規制されながら、稲作を妨げず、「稲作論理化」して行われる。水田用水系の発展段階と平行して並立→内部化→内部化の強化・高度化が進む [安室 1994 : 593、618]。安室は、稲作地の内部化は貨幣経済の進展にあっても、近年まで食糧自給のための生計維持の基本姿勢と矛盾することなく、「稲作の単一化（特化）を押し進めることのできた最大の要因」であるという [安室 1998 : 618-619]。

安室の複合生業研究は、軽視されてきた内水面漁撈の重要性を指摘し、生業の具体的な担い手を、日本や村ではなく、人・家族といった分析単位に明確化する重要な視座を提供する [安室 1987]。この重要性は二点ある。一つは、生業選択を戦略として捉える視角を提供したこと [卯田 2003b、小林 2005]、また一つは、生業が、農業、漁業などといった分類では単純に概念化できないことを明らかにしたところにある [cf. 伊藤 1996、田島 2008]。例えば、安室は、高桑守史の「農民漁業」と辻井善弥の「農間漁業」と対照させ、高桑の概念が限定的であり、かつ、心意や世界観も含めた漁民類型は複合性を捨象していると批判する [辻井 1980、高桑 1983、安室 1992 : 50、2001 : 109-110、高桑 1984、1989]。この視座はまた、周縁的な生業行為に光を当て、十分に評価されてこなかった湿地帯、湖水域などでの生業行為を再評価することに連なった [河岡 1976ab、菅 1990、1991、1994]。

問題もある。「生業」概念が、生計維持なのか、生産対象を生産する作業全体なのか、あるいは、個別の技術を指すのかが明瞭でない [菅野 1994:75]。生業の分化や未分化が、複合生業と理論的にいかに関連するのか位置づけられていない。安室は、稲作地の複合生業の担い手を「稲作民」で一括するため、例えば、農民と淡水漁師との間（香川県池之尻）に見られる養殖と漁撈の技術的依存関係、あるいは、漁業者の増加例（長野県海ノ口）に推測される、地域社会における生業の複合化のダイナミズムの解明に課題を残しているのである。

(2)マイナー・サブシステム研究

松井健は、マイナー・サブシステムを「集団にとって最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」だとする [松井 1998]。定義の詳細は省くが、松井は、宮古群島南部地域の鷹狩り、ジュゴン、ウミガメ、イルカ、シイラ突き漁などの例を挙げ [松井 1998 : 249-254、259-267]、生業活動が生産目的であるという考えは一面でしかなく、この概念からより普遍的な性格を抽出すべきだとする。マイナー・サブシステム研究は生業研究の暗黙裡の前提的枠組みを批判して登場したのである。

この概念は、さらにウグイ漁やタコ漁、水鳥猟やサケの仕掛け漁を例に敷衍されている

[佐治 1998、2006、菅 1995、1998]。菅豊は、新潟県大川のサケ漁を取り上げ、くじ引きで決められた持ち場でサケを漁獲する漁業者の営みが楽しみとして行われている点を、①サケを通した人々とのつきあい、②競争やかけひき、③偶然の楽しみに整理する。菅は、生活には「生産を伴う活動であるにもかかわらず、生産の多寡や経済性自体を目的化していない活動」が多くあるとし、楽しみとしての性格は、「伝統漁業の本来的性格」だという [菅 1998：243]。菅は、ヨーロッパ的な労働観から抽出された「疎外された労働」という近代的イメージを相対化し、「活動そのもののもつ魅力自体」が目的化され、生業の開始や継承の「原動力」たり得ると主張する [菅 1998：245-246]。

労働観を相対化する視座を提供したマイナー・サブシステム論は、取るに足らない評価しか与えられてこなかった生業行為の重要性も再認識させた [菅 1995]。しかし、生業が楽しみなのか生産を目的とするのかを議論することに本質的意味はない。複合生業の個別の生産活動は、本来未分化で生活に埋没しており、どちらも生業の本質と認識できるからである。松井はこの概念を伝統的生業に限定するが、その限定をはずし、歴史的文脈と関係付けることで理論的有効性が高まると考えられる [松井 2001、菅 1998：244]。

(3) サブシステム研究の課題

特定の時や場において、なぜ、楽しみや生産性が重視されるのかを捉えるために、サブシステムの研究は、具体的な場や社会経済的文脈と関連づけることが必要である [中野 2001]。この課題に則すと、第一に複合生業論の理念に戻って生業概念を拡大し、人を中心とする「生」を捉える必要がある。そもそも、複合生業研究の理念は、人や家族を中心においた生計維持を問題とする。従って、家内の労働も視野に入れ、家の経営規模、経営者の考えや管理、家族構成などによって現れる差異や儀礼や信仰などによって意味づけられる面も関連づけることが肝要である [高桑 (史) 2004]。例えば、構成員の自己裁量という視角から見ると、嫁の自己裁量は一般に少ないと見られるが、海女のそれは顕著でありながら、諸々の社会的条件によって拘束されてもいる [鶴 2003、竹内 2000、cf. Nadel-Klein and Davis 1988]。性別年齢別区分は儀礼によって象徴的に意味づけられており、この面の重要性は、今後積極的に掘り下げる必要がある [中野 2000、高桑 (史) 2004]。

第二に、具体的行為を捉え、歴史文脈下に位置づけることが求められる。北西功一は、伊平屋島のモズク養殖において、作業を控えた従事者の中で意見が一致しない事例を取り上げ、その背後にある利益をめぐる労働観が、成長志向と安定志向といった対極的なものであることを指摘する。成長志向は、糸満系ウミンチュの方法が伊平屋島の若者に新しく取り入れられ、普及し始めたもので、他方の安定を志向する伝統的伊平屋島の労働観との間で葛藤を呈している [北西 1990]。サブシステムの複合性や多面的性格は、個々の実際の行為から把握し、社会経済的背景と関連づけることで現代社会の歴史的な文脈に適切に位置づけることが可能になる [cf. 菅 1998:244]。

5 資源利用の研究

(1) コモンズ概念と漁業における資源管理

コモンズとは、生物学者ギャレット・ハーディンが提唱した寓話「コモンズの悲劇」に

より発展した概念である [ハーディン 1991 (1968)]。この寓話は、共同の牧草地に牛を放牧する者の中から特定の者が、さらに牛を増やして利益を増加させた場合、他の者も同様に牛を増やして放牧するため、狭隘化と採草機能の低下により共有地は崩壊する。ゆえに、共有地を私有化あるいは国有化すべきとした。この提唱の背景には、歯止めの利かない軍拡競争、人口や汚染問題、海洋資源の枯渇など地球規模の環境悪化があった。このため、漁場利用、入会や共同利用に関する研究には、学際的であると同時に、資源の適正な管理に向けた応用的研究の色彩が多分に見られる [秋道・岸上 2003]。

資源管理における漁業の位置づけは、陸地と異なる困難さがある [三俣・森元・室田 2008]。河川と海とでは関わる歴史や法規制が相違し、漁業法、水協法、及び、漁業協同組合における扱いなど、資源管理や共同性の現れ方は漁業種や対象魚種ごとに、また地域ごとに異なる [林 2009]。漁業経済学においては、1980年代から、魚種や漁法などを対象に、漁獲（努力）量、魚価関数によって漁業総収入を算出し、次回の漁期が始まる際の資源量を推定し、適度に管理する方策を模索しており、コモンズ概念と関連づける研究も行われているが、実際上の問題が多く指摘されている [平沢 1986、長谷川 1993、牧野 2007、宮澤 1996]。

(2) 民俗学における資源利用の研究

菅豊はコモンズ概念を積極的に導入し、抽象化により共通言語を獲得することで、多面的議論による研究の進展と、制度や政策へ提言する必要性を説く [菅 2008]。菅はコモンズを「複数の主体が共的に使用し管理する資源や、その共的な管理・利用の制度」と定義し [菅 2006a : 219]、新潟県岩船郡山北町の大川におけるサケ漁の資源利用を詳細に検討する。菅は、近世期におけるサケ漁の漁法の違い⁽⁶⁾を取り上げ、各々の社会的制約や管理が異なっていることを指摘し、明治以降においては近代法とズレを持ちつつ、もつれあいながら変化するその姿が、柔軟で重層的な構造を有するという [菅 2006a]。菅の視角の環境社会学的性格は、地域社会におけるコモンズの知見を今後の社会設計、すなわち「現代社会に応用したい」と考えるところに認められる。だが、資源利用の実態と近代法の導入による複雑な関係を歴史的に解明する視角にも立って菅は、鳥越皓之や嘉田由紀子らによる「前近代的総有」の価値について、近代所有法導入以前に「どのような価値をもち、導入以後にそれがどのように変化」し、結果、人々の生活にどんな「変化をもたらしたのか」を明らかにする必要があるとする [菅 2004]。菅の視角は、教義的な法学的総有概念と距離をとることで環境社会学的な立場に近く、かつ、地域社会の歴史的展開を重視する点で民俗学的である。方策提言よりも事実経緯の解明の重視が評価される [cf. 井上 2009]。

コモンズ研究の方向性は、資源管理へ資する事例を発掘し制度設計へ理論的提供を行うのか、あるいは、多様で複雑な様相をいかに捉えていくかについての事例研究や理論的検討を行うのかに大きく分けられる [秋道 2004、葉山 2005a、増崎 2006、飯田 2008]。前者には、資源管理の成功というバイアスがあり、その視角から事前に排除、差別される存在があるとの疑義が提起されている [三浦 2005]。後者の視角では、対象やその変化の全体と細部をいかに的確に捉えるかが問われている [中野 2008]。

(3) 民俗学における資源利用研究の課題

2点の課題を挙げることができる。一つは、資源の利用や管理のあり方へ、生産者あるいは制度設計といった一方の立場に視点を置く、択一的アプローチを超越する必要性である。また一つは、現代に視点を定め、漁業やその地域社会を取り巻く歴史的社会的文化的背景やその変動を対象化する必要性である。

赤嶺淳は、北海道や東南アジアの島嶼部におけるナマコ漁の資源利用を事例に、資源利用は、在地内で完結する閉鎖的領域ではなく、その外側の国際市場と連鎖的に連なっており、従って、漁民の生業は変転し、島民の生活圏は伸縮自在に変化しているとする〔赤嶺 2002、2007〕。資源管理は、生産者や、漁民の「生きがい」を損なわせない方向で進める必要がある。赤嶺は、国際的資源管理で重要な位置を占めるワシントン条約の絶滅危惧種の指定やそれに関わるワークショップの問題を掲げながら、生物学者、漁民、問屋、消費者など「それぞれの利害関係者がナマコにいただく意味づけを明らかにしていくことが先決」だとする〔赤嶺 2005〕。関恒樹は、資源管理には個を統治する制度化のプロセスとその秩序を改変していく文脈化のプロセスが表裏一体に存在し、相互規定的に村落レベルへ浸透すると捉え、両者の弁証法的関係性を明らかにする重要性を説いている〔関 2009〕。

ガット・ウルグアイラウンド以降、農業で打ち出された「多面性」の影響が第一次産業へ押し寄せている。これを背景に資源概念を、漁業や水産資源に限らず、物質・非物質的な遺産や文化領域にまで拡大し、文化財の保護や観光化をも対象化する研究が登場している。安室知は、稲作の機械化や現代化に伴って行われなくなった水田漁撈が復活している例を取り上げ、環境思想を背景とする教育や観光資源として利用・活用されている様相を検討している〔安室 2005、2006、2008〕。現在では、生活の文脈を離れ、異なる立場の者（機関）が、資源利用や活用を試みる関係性の複雑化が認められるのである。その関係性の中で伝統や権利の主張のされ方に関心を向け、「正当（統）性」の構築過程を明らかにする構築主義の視角の重要性が説かれている。菅豊は坂網を例に、矢野晋吾は琵琶湖の漁業権の多面的な位置づけを例に論じている〔菅 2006b、矢野 2006〕。

資源利用に対する視角は、現代を時間軸に取り、生産面や流通、消費のみならず、保全・保護され、新たに価値づけられる自然や文化にまで射程をマクロに広げている。同時に、立場の異なる個々人の生産・生活スタイルや価値観にまでミクロに迫り、多元的総合的に捉えることが求められている。

6 おわりに

(1) 「漁業民俗」研究史の特徴と課題

以上、漁民社会研究、知識・技能研究、サブシステム研究、資源利用の研究を整理してきた。これらレビュー内容には類似の課題が輻輳して認められる。それは、①主体の能動性の過度な強調に対する制約、すなわち、多元的な社会的視点の必要性、②漁業概念の狭小性を乗り越える拡大の必要性、③共時的あるいは非歴史的位置づけに対する歴史文脈化の重要性、の3点にまとめられる。

①については、漁民社会研究における捉え方と、例えば、知識・技術研究における捉え方との間に議論はみられない。漁村、あるいは個人の強調が各々で主張されている。②や

③についてもほぼ同様の状況にある。生産の側面を越えて、どこまで取り上げるのかは論者によってまちまちであり、捉える時制的深度も様々なまま放置されている。各々の枠組みは、専門分化したまま相互に関連を持たず、序々に変化してきたと言える。従って、「漁業民俗」の研究は、異なる領域の枠組みを交差させ、全体を見通して現状に対峙し得る視角を構築する必要がある。そのためには何が必要であろうか。

まず、「漁業」概念を生活全体に広げるだけでなく、地域社会を越えたグローバルな連関性の中に付置する必要がある。抽象的時空間上の過度なモデル化よりは、具体的な社会過程や歴史的な文脈との関連性が必要である [cf. ベスター 2007]。そこで本章では、主体と構造という両極端に描かれてきた担い手について新たに焦点化することを試み、そこから全体を捉える視座を整理し、最後に、概念の政治性についての研究に触れ、「漁業民俗」研究における課題を確認する。

(2) 「漁業民俗」研究に求められる視座

焦点化すべきは家族・世帯レベルである。既に鈴木榮太郎は、家族の周期的サイクルによって家族経済の動態を捉えようと試みている [鈴木 1940、cf. 川崎 1985、友部 2007]。鈴木は、農民のことわざ「総領の十五は貧乏の峠」「末子の十五は栄華の峠」に触れ、その周期的サイクルが生業の複合性を枠づけ、家族の内側からいかなる変化が構造的に発生するかを重視している。この考えを複合生業研究の課題と関係付けて敷衍すると、女性の重要性を再認識しながら、具体的な人や人同士がなす意志決定や生活過程、および、女性と儀礼や信仰の特異な関わり方を射程に入れる必要がある [藤森 1997、高桑 1993、三木 1993、Martinez 2004、高桑 (史) 2004、中道編 2008]。

家族・世帯レベルと共同体の間にも密接な関係が認められる。例えば、三浦敦は、フランスのジュラにおけるチーズ生産組合における資源利用を取り上げ、共同体レベルの意志決定が家族構成員の意志に規定されつつ、共同体外部の社会経済的背景と接合している様を描く [三浦 2005]。また、スコットランドにおいてはかつての漁家女性の重労働の姿が漁業の衰退によって観光対象となっている。その遺産は地域社会のアイデンティティを構成するだけでなく、未来にも影響を与えるため、女性達の重要性は、漁業における過去の役割をいかに再構成するかに媒介されている [Nadel-Klein 2000]。

しかし、家族・世帯レベルへの焦点化は、社会関係の規制を受ける存在や構造に埋め込まれた個人としての存在だけではなく、規制や構造と主体的に関わる存在を捉える重要な位置にある。課題は、家族・世帯を完結した統合体として捉えるところではなく、また、女性のみを特筆するところにもない。家族を構成する各々の主体的生き方を明らかにすべきであろう。既存の例としては、「私」のお金についての研究が示唆的である。小遣いや内証金を稼ぐ生産行為は、家内的領域のみならず、漁船や漁村の組織や企業的経営組織と関わっており、多様な様相の背後には様々な条件や要因が関わっている [伊豆川 1955、大海原 1996、中野 1999、2000、枕崎市誌十年史編さん委員会編 2000]。岐阜県白川村の大家族を例に、「私」のお金として知られる「シンガイ稼ぎ」の実態を明らかにした柿崎京一は、シンガイ田の配分へ家長が関わり、シンガイ物に対する買い請けが家長や他集落の者に拡がりつつ、シンガイ物は個々人の自由裁量でもあったこと、このような稼ぎが時代に対応した商業的生産行為であったと指摘する [柿崎 1999、cf. 江馬 1943]。

個々の者が拘束を受けながら主体的に生きている様は、家族・世帯レベルに照準を合わせつつ、共同体との関係や、社会経済的背景に関連づけることで重層的に捉えることができる。生計維持や漁家経営の資料は入手困難である場合が多いが、漁船台帳、船員手帳のほか、日記の活用などは今後、より進められるべきであろう〔河原 2001、増崎 2007、安室 1992b、1995、永島 1996〕。「私」の（稼ぎなどの）レベルから、意志決定などの生産的行為のみならず、表象される女性像などの文化遺産の管理の仕方まで幅広く対象化し得る視座が必要なのである。

(3) 民俗学的概念の政治性

民俗学における学術概念は対象を抽象的なレベルで正確に把握するだけにとどまらない問題を抱えている。最後に、漁業民俗の研究における概念が内包する政治性を批判的に見極め、新たな課題設定に向けて、求められる作業を確認する。

小川徹太郎は、1980年代半ばに「日本」の歴史を描き直す試みが「海の視点」から提唱され、大衆的な聴衆を獲得していった現象が「海民」モデルを背景とする表象の問題であると捉える〔小川 2001〕。「海」という概念は、戦前に語られた「海国思想」に認められる言説上の特質と重なって反復され、明治20年代に出発し、日清戦争前後に男性向けの国民思想として語られる「海国思想」と連なってくる。小川は、宮本常一の「海から見た日本」を批評しながら、「海国思想」と「海民思想」の形式に類似性を捉え、支配的な位置において構築される「調和モデル」が、現実の矛盾や葛藤、あるいは「他者」による抵抗を「隠蔽」したり、国家や資本主義の支配構造から人の目をそらしたりする「イデオロギー的な言説」として働くこと、それが現在まで政治関係を通じて行われていることを指摘する。従って、「常民」、「海人」、「海民」などの「調和モデル」として構築される「民」の概念化に認められる「政治性」を見極めるべきと説く。ここでの「政治性」とは、すなわち、「形象化を通じて否定され、抹消され、曖昧化」される研究、語り、記憶、あるいは「社会的対立や文化的闘争の過程」を指す。小川は、それらを捉えるための「問題設定や分析モデル」を構築する必要を説くのである〔小川 2001:5-10〕。

小川の省察は、柳田や桜田らに及び、漁業民俗研究における多くの概念（常民、海民、漁民、漁村、海女⁽⁷⁾、海洋民）が問題を帯びている〔小川 2003a、cf.田島 2006、野地 2008〕。漁業民俗の研究に貢献した民俗学者の足跡を背後の歴史文脈に関連づけ、概念を再検討することが求められているのである。一例を挙げてみよう。例えば、桜田勝徳が、戦前において「漁村」概念を強調していた点については、桜田が『水産界』などの執筆を行うなど、農林省水産局の嘱託として水産行政の一端へ間接的に関与していたことと関係付ける必要がある。小川は、全漁聯の雑誌『海の村』の分析を通じて、全漁聯や漁業増産報国推進隊と海国思想の関わりを明らかにする〔小川 2003a〕。小川は、『海の村』には桜田勝徳その他の漁業・漁村研究者が執筆しており、1943年における国策的漁業組織、漁業会への再編に際して民俗学的知識が漁村再建の論拠として用いられているという⁽⁸⁾。

註

(1) この点は『漁業経済研究の成果と展望』において、人類学の成果が盛り込まれつつ、民俗学の成果が収録されていない所にも現れている〔漁業経済学会編 2005〕。

- (2) 第9回国際人類学・民族学会(1973)が開催され、海洋人類学が勃興した。この学問は、一方のFredrik Barthの影響を受けた北欧・北米のそれが、産業化される漁業を対象に漁船内協同などの社会組織とその変容を重視するのに対し、他方の太平洋におけるそれは、島嶼域の多様な漁撈文化へ生態学的視角からアプローチする傾向が強かった。1980年代、世界的な海洋資源管理の要請とコモンズ論の影響によって、両者の差は目立たなくなり、北欧・北米の海洋人類学も生態学的比重を高め、社会組織への関心は希薄となっている。近年では、生態学的視角の研究でも、社会資本の概念を導入して「資本」の概念を強調したり、経済的背景との関連を重層化して捉えたりする者がある[卯田 2008ab、飯田 2008]。
- (3) 海洋人類学における生態学的観点へ対する批判の一つは、生態を均衡のとれた一つの完結した体系と捉える偏向にある[McCay 1978]。これに対し、生態学にイベントやポリティカルなどの視角を設ける試みが模索されている[McCay 2002、飯田 2008]。その視角は、資源管理を意図するコモンズの視角と交差することで、境界を画定し完結した共同体像を強調する点が否めず、実際にも問題視されているからだ[Ginkel 2009]。
- (4) 高桑は、「漁民集団」の個性、商人的性格、漁民の類型などの論考に加え、海外の人類学年報の動向から、海洋人類学の2つの潮流を紹介している[高桑 1993:18]。
- (5) 原語はSkipper Effectであるが、船長の力と訳すものもある[西村 2006]。この議論の概要は以下で得られる[McGoodwin 1990、飯田 2008]。
- (6) コド漁=村的管理、ヤス漁=組中入会、流し網=村を越えた流域的管理を指す。
- (7) 小暮修三の研究は、『ナショナル・ジオグラフィック』誌の検討から海女の表象の性格を明らかにしており、民俗学の概念が有する政治性について省察の契機を与えてくれる。小暮は、上記の科学雑誌に、西洋の女性の裸体は現れず、掲載されるのはいずれも非西洋有色人女性であることに触れ、日本の海女の裸体が公然と掲載された点に性的欲望を内在させたオリエンタリズムを認める。海女の裸体へのこだわりは人類学者の撮影にも認められる。戦前期の海女の写真は磯シャツ姿であったが、戦後に裸体姿へ変わる。この点を、小暮は、産業の転換を背景に登場した観光海女と関連づけ、生業としての海女から視線の対象としての観光海女に変わったとみる[小暮 2009]。海女の活動を裸潜水漁と捉えてきたのは民俗学も同じである[田辺 1990]。だが、海女研究の先陣を切った瀬川清子の調査時点においても、海女の姿は既に裸体ではなかった。磯シャツなどを着用する海女の姿を目にしながらも、民俗学はその姿が裸であると強調してきた。宮本常一が、観光化された海女について「その職業の衰亡を物語る以外に何もものない」と評しているように、民俗学は、磯シャツを着て潜る海女の存在や、それを促す社会経済的背景を捨象し、裸潜水漁の意義を学術的に権威づけてきたとも言える[宮本 1990(1978)]。なお、海女の身体とエロティシズムの表象の検討は、[Martinez 2004、鈴木 2008]にも見られる。Martinezは、1950～70年代における民族誌学者や生理学者による海女の身体を対象化する視角が1930年代の暉峻義等(労働科学研究所)に遡り、その研究手法がナチスのグロテスクで恐ろしい低体温実験等にも連なることを指摘する。鈴木堅弘の絵画分析は、浮世絵春画における海女の裸体やそれに関連するモチーフが、「海女の珠取り」の説話に連なることを指摘している。
- (8) 桜田は、戦後の漁業制度改革史料の事業にも関わった。水産試験場における対馬暖流調査へ桜田は漁村調査の調査計画として携わり、調査項目や手法(『漁村調査手帳』(1954)、『漁村実態調査について』(1956))について指導や講義を行っている[池田 2008]。

引用・参考文献(和文)

- 赤嶺淳、2002「ダイナマイト漁民社会の行方」、秋道智彌他編『紛争の海：水産資源管理の人類学』、人文書院
- 赤嶺淳、2005「資源管理は地域から一地域環境主義のすすめ」『日本熱帯生態学会ニューズレター』、58
- 赤嶺淳、2007「環境主義をこえて一利尻島にみるナマコの自主管理」、秋道智彌編『資源とコモンズ(資源人類学-8)』、弘文堂
- 秋道智彌、2004『コモンズの人類学：文化・歴史・生態』、人文書院
- 秋道智彌・岸上伸啓編、2002『紛争の海：水産資源管理の人類学』、人文書院
- 飯田卓、2008『海を生きる技術と知識の民族誌—マダガスカル漁撈社会の生態人類学』、世界思想社

- 池田哲夫、1992「佐渡のイカ釣具—明治十六年水産博覧会出品漁具解説書より—」『佐渡史学』、14
- 池田哲夫、2004『近代の漁撈技術と民俗』、吉川弘文館
- 池田哲夫、2008「内橋潔と漁村実態調査—日本海区水産研究所所長時代」『高志路』、369
- 石原俊、2007『近代日本と小笠原諸島：移動民の島々と帝国』、平凡社
- 伊豆川浅吉、1955「代分け制の起源に関する若干の考察」『常民文化論集』、1
- 伊藤康宏、1996「近世的漁業秩序の再検討」、荒木幹雄編『近代農史論争』、文理閣
- 井上真、2009「自然資源「協治」の設計指針—ローカルからグローバルへ」、室田武編『グローバル時代のローカル・コモンズ（環境ガバナンス叢書：3）』、ミネルヴァ書房
- 卯田宗平、2001「新・旧漁業技術の拮抗と融和—琵琶湖沖島のゴリ底曳き網漁におけるヤマアテとGPS—」『日本民俗学』、226
- 卯田宗平、2003a「漁撈活動における「技術」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』、100
- 卯田宗平、2003b「「両テンビン」世帯の人々—とりまく資源に連関する複合性への志向」『国立歴史民俗博物館研究報告』、105
- 卯田宗平、2008a「ウを飼い馴らす技法—中国・鵜飼い漁におけるウの馴化の事例から—」『日本民俗学』、254
- 卯田宗平、2008b「生業環境の変化への二重の対応：中国・ポーヤン湖における鵜飼い漁師たちの事例から」『文化人類学』、73（1）
- 内田幸彦、2003「旅の記憶と痕跡—江戸川の川漁調査から—」『埼玉民俗』、28
- 江馬三枝子、1943『白川村の大家族』、三國書房
- 大海原宏、1996『カツオ・マグロ漁業の研究：経営・技術・漁業管理』、成山堂書店
- 大田区立郷土博物館編、1995『明治時代の水産絵図：明治の博覧会へ出品された水産業の絵図』、大田区立郷土博物館
- 大村敬一、2002「「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えて—交差点としての民族誌の提言—」『国立民族学博物館研究報告』、27-1
- 小川徹太郎、1988「書評 河岡武春、1987『海の民—漁村の歴史と民俗—』、平凡社」『日本民俗学』、173
- 小川徹太郎、2001「海民モデルに対する—私見」『地方史研究』、293
- 小川徹太郎、2003a「海の村を建設する—戦時期海の村の分析—」『伊東市史研究—伊東の今・昔—』、3
- 小川徹太郎、2003b「書評 野地恒有著『移住漁民の民俗学的研究』」『日本民俗学』、234
- 小川博、1970「日本における漁撈民俗研究の動向」『海事史研究』、15
- 小川博、1976「日本の漁撈民俗の研究への一試論」『民俗』、92、相模民俗学会
- 小川博、1984「日本における漁撈民俗研究の動向（続）」『海事史研究』、41
- 柿崎京一、1999「飛騨白川村「大家族」の生活構造—シンガイ稼ぎの実態分析」『村落社会研究』、10
- 河岡武春、1976a「低湿地文化と民具（一）—新潟県蒲原地方を中心として—」『民具マンスリー』、9-3
- 河岡武春、1976b「低湿地文化と民具（二）—新潟県蒲原地方を中心として—」『民具マンスリー』、9-4
- 河原典史、2003「伊吹島からの漁民の移動と展開」、平岡昭利編『離島研究』、1、海青社
- 川崎有三、1985「世帯サイクルのシステム論的分析—マレーシア潮州人漁村の事例から—」『アジア・アフリカ言語文化研究』、30
- 川端牧、1999「糸満の魚名を考える—知識の個人差と専門化という視点から—」『沖縄文化』、35-1
- 菅野剛宏、1994「海苔製造家の生業複合—千葉県浦安市を事例として—」『常民文化』、17
- 北西功一、1990「モズク養殖の導入にともなう労働組織・分配・労働観の変容—伊平屋島ウミンチュ社会の事例から—」『沖縄民俗研究』、11・12合併号
- 漁業経済学会編、2005『漁業経済研究の成果と展望』、成山堂
- 金柄徹、2003『家船（えぶね）の民族誌：現代日本に生きる海の民』、東京大学出版会
- 小島孝夫、1987「アワビ採集からみた潜水採集活動—三重県志摩郡大王町畔名の海女の事例—」、日本民具学会編『海と民具』、雄山閣
- 小島孝夫、2001「複合生業論を超えて」『日本民俗学』、227

- 小暮修三、2009「海女の表象—『ナショナル ジオグラフィック』に見るオリエンタリズムと観光海女の相互関係—」『日本研究』、39
- 小林亜希子、2005「家の生業選択と労働力—夏泊半島沿岸部漁村における生業の複合から—」『青森県の民俗』、5
- 桜田勝徳、1954「民俗—漁村民俗探求の経過とその将来—」『村落研究の成果と課題—村落社会研究会年報』、1
- 佐治靖、1998「ウグイ漁とナレズシ」、篠原徹編『民俗の技術（現代民俗学の視点：1）』、朝倉書店
- 佐治靖、2006「開発と自然、そしてマイナー・サブシステム—浅瀬の海のタコ漁を事例に」『バイオストーリー』、5
- 篠原徹、1986「1本釣漁師の生態」『季刊人類学』、17（3）
- 篠原徹、1989「鵜のこころ・鵜匠のこころ」『列島の文化史』、6
- 篠原徹、1990『自然と民俗』、日本エディターズスクール出版部
- 篠原徹、1993「植物民俗にみる地域差—樹種選定と植生—」『国立歴史民俗博物館研究報告』、52
- 篠原徹、1995『海と山の民俗自然誌』、吉川弘文館
- 菅豊、1990「『水辺』の生活誌—生計活動の複合的展開とその社会的意味—」『日本民俗学』、181
- 菅豊、1991「『低湿地文化論』その可能性と課題—河岡武春とその展望について—」『史境』、21
- 菅豊、1994「『水辺』の開拓誌—低湿地農耕は、はたして否定的（ネガティブ）な農耕技術か？—」『国立歴史民俗博物館研究報告』、57
- 菅豊、1995「『水辺』の技術誌—水鳥獲得をめぐるマイナー・サブシステムの民俗知識と社会統合に関する一試論—」『国立歴史民俗博物館研究報告』、61
- 菅豊、1998「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論—」、篠原徹編『民俗の技術（現代民俗学の視点：1）』、朝倉書店
- 菅豊、2001「自然をめぐる民俗研究の三つの潮流」『日本民俗学』、227
- 菅豊、2004「平準化システムとしての新しい総有論の試み」、寺嶋秀明編『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版
- 菅豊、2006a『川は誰のものか—人と環境の民俗学』、吉川弘文館
- 菅豊、2006b「『歴史』をつくる人びと—異質性社会における正当性の構築—」、宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ—レジティマシーの環境社会学—』、新曜社
- 菅豊、2008「環境民俗学は所有と利用をどう考えるか？」、山泰幸、川田牧人、古川彰編『環境民俗学—新しいフィールド学へ』、昭和堂
- 鈴木栄太郎、1940『農村社会学原理』、日本評論社
- 鈴木堅弘、2008「海女にからみつく蛸の系譜と寓意—北斎画「蛸と海女」からみる春画表現の「世界」と「趣向」」『日本研究』、38
- 関恒樹、2007『海域世界の民族誌—フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ—』、世界思想社
- 関恒樹、2009「グリーン・ネオリベラリズムとエイジェンシーの共同体：フィリピンの海域資源管理の事例から」『文化人類学』、73（4）
- 高桑史子、2004『スリランカ海村社会の女性たち：文化人類学的研究』、八千代出版
- 高桑守史、1975「漁業形態の展開過程と村落構造—能登半島沿岸社会の形態分析（1）—」『民俗学評論』、13
- 高桑守史、1976a「半農半漁村における専漁化過程と村落構造の展開—能登半島沿岸社会の形態分析（2）—」『民俗学評論』、14
- 高桑守史、1976b「定置網漁村に於ける網株と階層構成—能登半島沿岸漁村社会の形態分析—」『日本民俗学』、104
- 高桑守史、1976c「漁撈活動と漁村社会—沿岸漁村の諸相—」、和歌森太郎編『日本民俗学講座（経済伝承）』、1、朝倉書店
- 高桑守史、1983『漁村民俗論の課題』、未来社

- 高桑守、1984「伝統的漁民の類型化にむけて—漁撈民俗研究への一試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』、4
- 高桑守史、1993「漁撈民俗をめぐる諸問題—海洋人類学の足跡と漁民研究—」『千葉県史研究』、1
- 高桑守史、1994『日本漁民社会論考：民俗学的研究』、未来社
- 竹内由紀子、2000「海女にみる女性の社会的地位」『民俗学研究所紀要』、24
- 田島佳也、2006「網野史学の「海民」論・「海村」論」『神奈川大学評論』、53
- 田辺悟、1990『日本蟹人伝統の研究』、法政大学出版局
- 辻井善弥編、1980『ある農漁民の歴史と生活』、三一書房
- 鶴理恵子、2003「「テマ」から「労働の主体」へ—兼業化と農家女性の自己認識の変化」『日本民俗学』、233
- 友部謙一、2007『前期工業化期日本の農家経済』、有斐閣
- 永島政彦、1996「農業日記にみる畑作農家の生業」『群馬歴史民俗』、17
- 中野泰、1999「漁民育成におけるカンダラの意義—玉江浦の遠洋漁業と漁獲物分配制度—」『日本民俗学』、218
- 中野泰、2000「「内証金」考—山口県玉江浦における若者と家の拮抗関係—」『比較家族史研究』、14
- 中野泰、2001「漁師根性とナグサミ—小舟漁師にみる老いの現実とその受けとめ方—」『国立歴史民俗博物館研究報告』、91
- 中野泰、2003「シロバエ考—底延縄漁師の漁場認識とフォーク・モデルの意義—」『国立歴史民俗博物館研究報告』、105
- 中野泰、2006「社会—民俗学における「社会」研究の過去と現在」『日本民俗学』、247
- 中野泰、2008「水産資源をめぐる平等と葛藤」、山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学—新しいフィールド学へ—』、昭和堂
- 中道仁美編、2008『女性からみる日本の漁業と漁村』、農林統計出版
- 西村一之、2006「台湾東部における漁撈技術と「日本」—近海カジキ突棒漁の盛衰のなかで」『アジア・アフリカ言語文化研究』、71
- 野地恒有、1987「桜田勝徳の「漁村民俗」考—漁村の民俗研究に向けての覚書—」『史境』、14
- 野地恒有、1998「「環境民俗学」の動向と移住誌のかかわり」『日本民俗学』、213
- 野地恒有、2001『移住漁民の民俗学的研究』、吉川弘文館
- 野地恒有、2008『漁民の世界—「海洋性」で見る日本—』、講談社
- ハーディン、G（桜井徹訳）、1991（1968）「共有地の悲劇」『環境の倫理』、下、晃洋書房
- 長谷川彰、1993『自主的漁業管理の諸形態：漁業資源管理の手引・経済篇』（長谷川彰、2002『漁業管理（長谷川彰著作集；1）』、成山堂書店）
- 林研三、2009「下北地方における法と共同性（その1）第1報告 漁業慣行と漁業協同組合一下北・東通村の事例報告と若干の考察」『札幌法学』、21（1）
- 葉山茂、2005a「自然資源の利用をめぐる社会的な規制の通時的变化—長崎県小値賀島の漁業を事例として」『エコソフィア』、15
- 葉山茂、2005b「生業活動における資源分配の構造と出かせぎ—青森県内の二つの漁業集落を事例として」『国立歴史民俗博物館研究報告』、123
- 平沢豊、1986『資源管理型漁業への移行：理論と実際』、北斗書房
- 福島真人、2001『暗黙知の解剖—認知と社会のインターフェイス—』、金子書房
- 藤森裕治、1997「生業のタテ糸」『信濃』49-1
- バスター、テオドル（和波雅子、福岡伸一訳）、2007『築地』、木楽舎
- 牧野光琢、2007「順応的漁業管理のリスク分析試論」『漁業経済研究』、52（2）
- 枕崎市誌十年史編さん委員会編、2000『枕崎市誌十年史』、枕崎市
- 増崎勝敏、2006「遊漁船業における漁場・資源利用の意思決定と合意形成：大阪府岬町小島を事例とした民俗学的接近」『地域漁業研究』、46（3）
- 増崎勝敏、2007「ライフヒストリーを用いた漁撈民俗研究の一試論—高知県中土佐町久礼の漁業者を例にとりて—」、『日本民俗学』、252

- 増崎勝敏、2009「大阪府下における香川県漁業者の出稼ぎの実態とその経緯—大阪府泉佐野市北中通のイワシんちやく網漁業の事例を中心に—」、『日本民俗学』、257
- 松井健、1975「民俗分類の機能—南西諸島の場合」『季刊人類学』、6（2）
- 松井健、1998「マイナー・サブシステムの世界」、篠原徹編『民俗の技術（現代民俗学の視点：1）』、朝倉書店
- 松井健、2001「マイナー・サブシステムと琉球の特殊動物—ジュゴンとウミガメ」『国立歴史民俗博物館研究報告』、87
- 松田陸彦、2003「瀬戸内海島嶼部の出稼ぎ—研究史の整理と若干の提言」『民俗学研究所紀要』、27
- 三浦敦、2005「フランス・ジュラの家族制農業における農家の意思決定—ジュラ・モデルによる酪農経営の社会的コンセンサスの基盤」『村落社会研究』、11（2）
- 三浦耕吉郎、2005「環境のヘゲモニーと構造的差別—大阪空港「不法占拠」問題の歴史にふれて—」『環境社会学研究』、11
- 三木奈都子、1993「アマ漁業における女性就業—壹岐島八幡浦の事例的考察」『漁業経済研究』、38（3）
- 三田牧、2004「糸満漁師海を読む—生活の文脈における「人々の知識」—」『民族学研究』、68-4
- 三俣学・森元早苗・室田武 2008『コモンズ研究のフロンティア—山野海川の共的世界—』、東京大学出版会
- 宮澤晴彦、1996「資源管理型漁業の実例と経済的諸問題」、平山信夫編『資源管理型漁業：その手法と考え方』、改訂版、成山堂書店
- 宮本常一、1969「民具学の提唱」『民具論集』、1
- 宮本常一、1990（1978）「海女ものがたり」、谷川健一編『海女と海士（日本民俗文化資料集成：4）』、三一書房
- 安室知、1987「自然と民俗—生態学と民俗学—」『民俗学評論』、28
- 安室知、1992a「存在感なき生業研究のこれから—方法としての複合生業論—」『日本民俗学』、190
- 安室知、1992b「『星野日記』にみる農民漁撈—明治19年～明治41年—」『横須賀市博物館研究報告』、(人文科学)、37
- 安室知、1995「『昼間日記』にみる農民漁撈」『横須賀市博物館研究報告』、(人文科学)、40
- 安室知、1998『水田をめぐる民俗学的研究：日本稲作の展開と構造』、慶友社
- 安室知、2001「『水田漁撈』の提唱—新たな漁撈類型の設定にむけて」『国立歴史民俗博物館研究報告』、87
- 安室知、2003「民俗分類の思考—魚の成長段階名とドメスティケーション」『国立歴史民俗博物館研究報告』、105
- 安室知、2005『水田漁撈の研究：稲作と漁撈の複合生業論』、慶友社
- 矢野晋吾、2006「漁業権の正統性とその変化—コモンズの管理としての漁撈—」、宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ—レジティマシーの環境社会学—』、新曜社
- 湯川洋司、1979「生業」『日本民俗学』、124
- レイヴ、ジーン・ウェンガー、エティエンヌ（佐伯胖訳）、1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』、産業図書

引用・参考文献(欧文)

- Acheson, J. M. 1981. "Anthropology of Fishing", *Annual Review of Anthropology* 10: 275-316
- Ginkel, Rob Van. 2009. *Braving Troubled Waters: Sea Change in a Dutch Fishing Community*. Amsterdam University Press.
- Hill, Jacquetta F. and Plath, David W., 1998. "Moneyed Knowledge: How Women Became Commercial Shellfish Divers," in John Singleton, ed., *Learning in Likely Places: Varieties of Apprenticeship in Japan*, pp211-225. Cambridge University Press.
- Martinez, D. P. 2004. *Identity and Ritual in a Japanese Diving Village: The Making and Becoming of Person and Place*. Univ of Hawaii Pr.
- McCay, B. J. 1978. "Systems Ecology, People Ecology, and the Anthropology of Fishing Communities",

- Human Ecology* 6(4): 397-422.
- McCay, B. J. 2002. "Emergence of Institutions for the Commons: Contexts, Situations, and Events," in Elinor Ostrom, ed., *The Drama of the Commons*, pp.361-402. National Academy Press.
- McGoodwin, J. R. 1990. *Crisis in the World's Fisheries : People, Problems, and Policies*. Stanford University Press.
- Nadel-Klein, J. and Davis, D.L. eds. 1988. *To Work and to Weep: Women in Fishing Economies*, Memorial University of Newfoundland, ISER.
- Nadel-Klein, Jane. 2000. "Granny Baited the Lines: Perpetual Crisis and the Changing Role of Women in Scottish Fishing Communities", *Women's Studies International Forum* 23(3): 363-372.
- Nadel-Klein, Jane. 2003. *Fishing for Heritage: Modernity and Loss Along Scottish Coast*. Berg.
- Palsson, Gisli. and E. Paul Durrenberger. 1983. "Icelandic Foremen and Skippers: The Structure and Evolution of a Folk Model", *American Ethnologist* 10(3): 511-528.
- Palsson, Gisli. 1994. "Enskilment at Sea", *Man*, New Series 29(4): 901-927.
- Palsson, Gisli, and Helgason, Agnar. 1998. "Schooling and Skipperhood: The Development of Dexterity", *American Anthropologist*, New Series 100(4): 908-923.
- Perez, Ricardo. 2005. "Unbound Households: Thrajectories of Labor, Migration, and Transnational Livelihoods in (and from) Southern Puerto Rico," in Lillian Trager, ed., *Migration and Economy : Global and Local Dynamics*. pp.49-75. AltaMira Press.
- Plath, D. W., Hill, J. F. 1987. "The Reefs of Rivalry : Expertness and Competition among Japanese Shellfish Divers", *Ethnology* 26(3): 151-163.